

京都市東九条の多文化共生のまつり 「東九条マダン」の共同性とその可能性

村上 究人

本研究では、1993 年から毎年 1 回、京都市南区東九条地域において開催されてきたまつり「東九条マダン」を事例として、現代社会の排外主義に個々人が抵抗する力となりうる、草の根による反差別の文化実践の共同性を明らかにすることを試みた。

【研究背景と研究目的】

1990 年代後半以降、日本社会においてマイノリティに対する排他的な意識が強まっている。その背景には、「日本人」や「健常者」というポジショナリティの普遍化と、これによる「在日朝鮮人」や「障害者」といった人たちの差異化、従属化がある。また、現代社会においては、他者との関係性の希薄化や自己責任論の浸透といった「液状化」の進行もみられる。一方、日本社会では 1990 年代半ば以降、多文化共生という言葉と共に、教育現場では反差別や反同化が目指された。しかし、その後、この言葉は政策用語となり、文化本質主義と管理主義の問題が浮上した。

本研究が事例とする東九条マダンは、1993 年から毎年秋に 1 日、地域の小中学校の校庭を会場として開催されるまつりである。このまつりは、1970 年代から 1980 年代の韓国と日本の反差別運動の思想を受け継ぐ「民族まつり」であると共に、近年では多文化共生のまつりとしても評価される。運営は全てボランティアであり、誰でも好きなこと、できることを通じて参加することができる。本研究は、冒頭で述べた課題を踏まえ、多様な担い手が構築してきた同まつりの共同性を明らかにし、草の根の文化的実践がこれらの課題に対してどのような役割を果たしうるのかを考察した。具体的には、①どのような背景を持つ人たちが担い手としてまつりへ参加し、そこで何が目指され、実際に何が起きたのか。②なぜ立場の異なる担い手たちが、共同性を構築し得たのか。③こうした担い手によって構築された共同性が、深刻化する差別や排除、そして個人化や液状化といった現代社会の課題に対して、いかなる役割を果たすのか、という点に分けて考察した。

【研究方法】

筆者は 2021 年からまつりのスタッフとして参加し、調査を行なってきた。たとえば、準備活動として実行委員会の会議、まつり当日に出演する楽器隊の練習会、広報活動に参加し、観察をおこなってきた。加えて、中核的な担い手を中心にインタビュー調査を 8 件実施した。また、補足として文献資料も用いた。

【研究内容】

本研究では、まず既存研究を整理し、特に片岡(2007; 2010; 2014)の研究が東九条マダンにおける多様な参加者とその相互作用を分析してきたことを取り上げた。これらの研究では、在日朝鮮人や日本人、障害者など異なるカテゴリーの人々が参加し、「楽しさ」の共有を通じて主体性を得る過程を明らかにした。しかし、これまでの研究では「主体性」や「楽しさ」といった点に主眼が置かれ、参加者の重層的な多様性や関係性の複雑さは十分に明らかにされてこなかった。

そこで、本研究ではまつりの準備に参加する人々が、どのような立場で、どのような思いを抱えながら活動しているのかを具体的な事例を通じて考察した。はじめに、会議や楽器練習会、広報活動といったまつりの準備過程の観察から、そこにおける参加者の関係性や、まつりの場で何が大切にされてきたのかという、現場の実践知を考察した。たとえば、まつりの実行委員会の会議では、フラットな関係が作られ、誰もが発言しやすい環境が整えられていたことが確認された。また、広報活動では、まつりの持続可能性を確保しようとする努力も見られた。

さらに、まつりの発足当初と現在の参加者の多様性を比較し、参加者がどのように変化していったのかを示した。初期のまつりには、在日朝鮮人や部落出身の日本人、支援者や障害者などが関わろうとしていたが、当初は参加者間で葛藤なども見られた。これに対して、現在では参加者一人ひとりのポジショナリティが強く意識されることはなく、より多様な立場の人々が担い手として参加していることが確認された。

その後、個別の参加者に焦点を当て、分析を行なった。たとえば、車いす使用者である G 氏は、まつりを「安心感」のある場とする一方、障害者の立場を意識して関わることもあると語った。また、D 氏はまつりの準備過程で感じる「しんどさ」や「苦しさ」が、当日の「楽しさ」で消え去ると語ったほか、自分を表現する場であるまつりの場を守っていききたいと述べた。

最後に、東九条マダンの「共同性」とはいかなるものなのか、そしてそれは現代社会における差別や排除の問題にどのように対処していくことができるのかについて考察した。まつりでは「楽しさ」だけでなく、「しんどさ」や「苦しさ」も含めたさまざまな感情含めた人間関係によって、共同性が築かれていた。さらに、まつりの準備作業が担い手間で共有されることによって、日常の中で多様性と自己の複雑さに向き合う機会が生まれていた。このような実践を通じて形成される人間関係は、差別

や排除に対して疑問を投げかけ、一人ひとりの多様性や複雑性を肯定的に捉える契機となる可能性があると考えられる。